

幼児画の心理と教育 (一)

——保育現場の問題を中心に——



守屋光雄

はじめに

づけとしてとくに重要な問題を中心に述べたいと思う。

一、幼児画教育(美術教育)の意義

「幼児画の問題」について、講座的に三回ぐらいいわたくしにわたって執筆するようにとの編集部からの御依頼であるが、本誌の読者層を考慮に入れ、保育現場における「絵画製作」(美術教育)の問題について、これを主として、幼児の心理や教育の面から考察して、幼児教育における「絵画製作」(美術教育)の意義、発達心理学からみた幼児画の特徴、臨床心理学からみた絵による診断と治療、幼児画指導の問題などについて述べたいと思う。しかし、これらの諸問題について詳説することは、紙数も許されないし、また、それぞれ専門の文献もあることだから、ここでは、現場における保育実践の方向

幼稚園教育の目標、保育内容としての「絵画製作」の指導計画や指導上の留意点についてはすでに文部省の「幼稚園教育要領」に示され、その実践手引書(例えば、上野芳太郎他共著「幼稚園教育要領の実践」(フレーベル館)などにも述べられているから、ここでは重ねて述べることをしない。

ただ私は、民主的人間形成の基盤が培われる幼年期においては、美術教育——現場における絵画製作の領域は、他の保育領域と並列

的にあるいは相互に関連をもつと言ふよりはむしろ、他の領域の、すなわち幼児教育の基礎としての意義をもつものと考ええる。私は、教育の真の課題は、社会の事象を正しく把握し、正しいこと・善なることは進んでおこない、不正や悪に対しては、あくまでこれとたたかってこれを克服し、真理の追求のためには、何物も恐れることなく全力をつくすことのできる教養と実力をもった、いわゆる主体性の確立した人間形成を目指すべきだと信ずる。そして、かかる主体性のある人間形成の基盤は、幼年期における且つ創造性を重んずる美術を通しての教育によってこそ確立されるばかりでなく、ハーバート・リード (H. Reed) が主張するように (註一) かかる芸術を教育の基礎とすることによって、教育を平和のための教育たらしめることが可能となるのである。

かかる意味で、幼年期における美術教育においても、近年、創造美術教育の立場が広く支持されるようになったのは当然であり、我が国でも、久保貞次郎、宮武辰夫、北川民次ら (註二) の功績は高く評価されるべきである。

この立場では、幼児の創造力を最大限に育てかつ伸ばすために、その障害となる抑圧を退け、幼児の精神を抑圧から解放することを主張し、従来の技術主義の美術教育を否定し、幼児自らの技法で、主として記憶や想像によって、好むところの絵を自由にかかせる。教師は、幼児の描画意欲を積極的におこさせるために、環境を整え、

刺戟、賞讃、承認、激励を与え、描画の結果よりもプロセスを重んずる。したがって、幼年期におけるマリエや写生などは排斥する。さらには教師自身の精神衛生も重視して、抑圧や劣等感に満ちた教師の人間解放をも叫ぶ。

ところで、このような創造美術教育の原理は、フリーベル (Froebel) 以来支持されている幼児の自発性を重んずる保育原理とも一致し、精神分析学ないしは臨床心理学の理論にも裏つけられ、人間形成の心理からみてもすぐれた理論をもち、実践面においても、幼児の絵に飛躍的進歩が認められつつある。ただこの主張の背景になつてゐる精神分析学の理論にもなお批判の余地があるばかりでなく、児童画の理解が精神分析学のみによらねばならぬと考えたり、創造力を、先天的なもの、本能的なもの素朴に考えがちであることは批判されねばならない。

このように創造美術教育が批判されはじめた今日、現実の事物の認識を深め、これを創造的に表現させるには、ただ子どもたちに、好む絵を自由に描かせ、創造力を豊かにし、その内部精神の自然の発展を信頼するだけでは不じゅうぶんであるとの見解から、もっと積極的に子ども同志の話し合いなどを媒介として、主として視覚的認識をたしかにさせるべきだという、いわば新しいリアリズムに立つ美術教育が主張されてきた。(註三)

創造美術教育とこの新しいリアリズムの美術教育を比較してみる

と、前者が描画を自己表現とみるのに対し、後者では、認識過程と
考え、前者がフロイト (Freud S.) の精神分析学や臨床心理学を背
景とし、無意識の心理を重視するのに対し、後者ではルイセンコ
(Lysenko T.D.) の生物学説や、パブロフ (Pavlov I.P.) の条件反射
の学習論を基礎として環境や意識の経験を重視する。前者が記憶や
想像によって描かせるのに対して、後者は、視覚造形的な表現活動
を重視するから、幼児期でも早くから写生画をもとり入れる。後者
は、このように、正しいものの方や考え方につながる個人の願
いを造形的表現を通じてみんなのものにしていく美術教育の立場とい
うことになる。前者が人間形成とか抑圧からの解放とか唱えなが
ら、ややもすると恣意的な人間形成に陥り、社会をより正しい秩序
のもとに方向づけようとする背骨の通った創造的人間を育てるのに
役立たないと非難する。さらに、感情情緒の世界も言語の発達に伴
って言語的知的認識の過程による裏付けが必要であり、幼児期にお
いても、話し合いを媒介として、ものの認識をたしかなものとし、
描画表現をこぎるだけ視覚的に正しいものに発達させていくように
指導される。(註4) たしかに、創造美術教育には前述のごとき欠点
があり、また今なお研究途上にあるいくつかの問題もある。他方、
認識過程を重視して、適切な訓練をすることも必要であろう。しか
し、その方法が幼児の発達心理を無視しておこなわれ、また自主性
を重んずる民主教育を逆行させる方向に向けられるならば、過去の

技術主義の図画教育への逆行でしかないし、知的認識を重視するあ
まり、レディネスや、学習への意欲を無視して強いられたり、ぬた
くり期や象徴期の段階にある幼児に視的なりリズムを強いること
は許されない。

要するに、幼年期における美術教育は、冒頭に述べた目的と意義
をもつものである以上、模倣や技術ではなく、自主性、創造性した
がって自己表現を重視する創造的美術教育でなければならぬが、
それは、決して指導を怠って放任することではなく、常に発達段階
に即しつつ、描画意欲をおこさせるための環境の構成と動機づけに
配慮し、例えば、変化にとむ多くの素材(大小の画用紙、新聞紙、
包装紙、種々の廃品、鉛筆、クレヨン、クレパス、筆、ペン、箸、
釘、マジックインク、木炭など)を臨機に与え、身心の積極的活
動、視聴覚触覚その他の全身の感覚を通じての動機づけ、あるいは
これらの素材を使つての自由な絵画製作活動(ぬりわけ、ゆび絵、
線画、手がた、足かた、デカルコマニー、フロッタージュ、砂、お
かくず絵、きりふき、ひっかき、版画、ねんど、廃品、自然物利用
の造型……)そして、他方日常外界の事象に対しても、感覚を通じ
ての感動的経験によって、幼児は幼児なりに感覚的認識を次第に深
めてゆくというのが、幼年期の美術教育のあり方である。(註5)

二、描画の発達段階（註6）

幼児画指導に当たっては、幼児の心身の発達とくに描画の発達について知らねばならない。描画発達段階の区分の仕方は、研究者によって多少異なるが、ここでは、それらの一つひとつをあげて説明批判することをさき、一般に認められているものについて述べておく。

1 搔画期（錯画、なぐりがき、いじくり、スクリップル）

大体一才ぐらいになると、乳児は、鉛筆やクレヨンを持つ手を自動的に動かして、わけのわからないものをかきなぐる。最初は主として自動的筋肉運動にすぎないが、最初は点と線、次に律動的・連続的な波状掻画や円形搔画があらわれ、次第に集中的断片的となっていく。初期の自動的筋肉運動には次第に視覚の共応が伴ってくる。表現として目的を持たず、したがって描かれたものに命名することもない。しかし、この時期の後期には、時に描かれたものに対して命名することもあるが、表現されたものと命名と表現の意図との間にならずしも一貫性が認められない。

しかし、この時期は、ただ自動的筋肉運動に終始する無意味な錯画の連続でなく、いじくり期（stage of manipulation）ということばが示すように、外界の事物——狭義では、素材——の性質や機能

への探求あるいは試験の時期で、かかる意味のいじくり期は、狭義の錯画期が一才から二才ぐらいであるのに対し、二才から四、五才にわたる場合もあるが、この段階をじゅうぶん経験させることは、幼児絵教育の上からも肝要であり、この時期に与える絵画素材は、難しい操作技術や練習のいらぬもの（例えば粘土、フィンガーペイント、ポスターカラーと筆 など）が適当である。

2 象徴、図式期

この時期は象徴的表現の時期、象徴主義の段階（Stage of symbolization）とも呼ばれるし、また広く図式画の段階とも呼ばれる。すなわち研究者によっては二才半から三才ごろ（ぬたくり期とも重なる）を狭義の象徴期と名づけ、絵はぬたくりに近いが、かかれたものに意味づけをするが、具体的なまたは視覚的なものの形をあらわすのではなく、円や四角の記号、つまり象徴であらわす時期と考え、三、四才から八、九才ごろを図式期と名づけ、この時期は、すでに表現の意図をもって描かれることが多いが、それは視覚的な写実的態度で描かれるのではなく、叙述表現的態度を以て描かれる段階とするものもあるが、三才ごろまでは、ぬたくり期に入れ、四才から八才ごろまでを、現実の形態を描かず、象徴的な表現をすることを特徴とする意味から、象徴期と呼ぶものもある。いずれにせよ、幼年期はぬたくり期につづいて、「見るところを描かず、知るところを描く段階」

したがってまた、この時期の幼児画の表現形式には次のような特徴がみられる。

① 図式画（カタログ画）

幼児は、人、動物、植物、家などを描く場合、何度かいてもどんな方向からかいてもほとんど同じような型の絵をかく。

② アニミズムの表現

相貌的表現、擬人化

③ 拡大描写

強調しようとするものを大きく描く

④ 比例、割合、関係の欠如

⑤ 視点の混同、展開、平面、並列描写

⑥ 透視画（レントゲン画）

3、写実画の時期

八、九才ごろから、事実を客観的に描出しようとするようになる。

4、写生画期

単に、事実を描写することに満足せず、さらに美的価値において描こうとするのが、真の写生画の段階と言えるので、中学生ごろからである。

右のような発達段階に即して、絵画指導が計画されねばならぬ。

(註1) リード・H著 厨郷博訳 平和のための教育 岩波書店

リード・H著 塩村・水沢訳 芸術による教育 美術出版社

(註2) 久保貞次郎他 児童画の見方と指導 金子書房

久保貞次郎 児童美術 美術出版社

宮武辰夫 幼児の絵は生活している 栗山書房

宮武辰夫 幼児と情薄児の絵が訴えるもの 黎明書房

北川民次 子どもの絵と教育 創元社

北川民次 絵をかく子どもたち 岩波書店

(註3) 川口 勇 創造美術をこえて 黎明書房

(註4) 我が国でも平和山滝小学校、同幼稚園では、この方法が川口勇氏らの指導助言により実践されつつある。

(註5) 守屋光雄 幼児期の教育 第五十六巻 第九号 日本保育学会第十回大会発表要旨

(註6) 描画の発達に関する文献は数多いが、左の教冊にとどめる。

岡 宏子 描画の発達 児童心理叢書 行動の発達 下巻 金子書房

岡 宏子 描画の発達 現代教育心理学大系 第四巻 人間における諸機能の発達 中山書店

林美樹雄 美意識の発達

山下俊郎 改訂幼児心理学 朝倉書店

高橋省己 幼児教育心理学 関 書院

新しい絵の会 幼児画の指導 小山書店

(立命館大学 幼年教育研究所)